

た、「民主主義の不安定化において異なるパターンが生じている遠因」としてその現代への影響が強調される (pp. 8-9)。一方、冷戦に関しては、「本書では十分に検討できなかった課題」のひとつとして残された、と説明されるにとどまっている (p. 50)。ないものねだりになってしまうのを承知であえていえば、現代世界への影響に関する限り、冷戦下における大国の外交政策の影響はやはり分析から外せない要因なのではないだろうか。戦後にあらたな覇権国家として台頭したアメリカは、「反共」の目的のためにアジアのいくつかの国々の政治に非常に深く関与した。J.K. ワトソンによる近年の研究 [Watson 2021] が示すとおり、インドネシアや韓国等でみられた「左翼」や民主主義にたいする体制側からの弾圧は、冷戦下におけるアメリカの存在をぬきに考えることはできないのではないか。

#### 引用文献

Watson, Jini Kim. 2021. *Cold War Reckonings: Authoritarianism and the Genres of Decolonization*. New York: Fordham University Press.

小田なら. 『〈伝統医学〉が創られるとき—ベトナム医療政策史』京都大学学術出版会, 2022年, 316 p.

梅村 綺美\*

本書は、ベトナムの伝統医療が、植民地期

を経て独立・南北分断・統一という歴史の過程でさまざまな権力作用やポリティクスに晒されながら制度化されていく過程を明らかにするとともに、こうした制度化がその担い手たちにとってどのような意味をもつものとして経験されたかを検討するものである。著者によると、「ベトナムの伝統医学は、中国医学とのからみあい、西洋医学との競合、政治権力と草の根の人々とのせめぎあい、国家権力同士の衝突、国内統合のための象徴・名分などにされることを通じて新たなものとして形成されてきた」(p. 7) という。本書では、ベトナムの伝統医学において伝統とされる事象が、それを取り巻く権力・地域・社会背景といった複合的な要因によって定義や意味付けが創出されていくダイナミックな過程とともに、それが置かれる文脈に応じて丹念に検討されている。本書では、仏領インドシナ期以降のベトナムにおける伝統医療の制度化について、①仏領インドシナ期、②南北分断期の北ベトナム、③南北分断期の南ベトナム、④旧北ベトナムの政策を引き継いだ統一以降ドイモイ前までの時期の4つの時期・地域に分けて分析される。

本書は、序章・終章と5章を合わせた全7章および2つのコラムから構成されている。

序章「伝統医療はいかにして『伝統医学』となったか」では、ベトナムにおける伝統医学の位置付けとナショナル・アイデンティティの関係について、歴史的な過程を追いつながりながら検討するという本書の視座とともに説明される。

第1章「触媒としての西洋医学—フラン

\* 名古屋大学医学系研究科総合医学教育センター

ス植民地期」では、ベトナムに西洋医学が導入された阮朝末期から仏領インドシナ期を中心に、植民地政府による現地社会の医療への介入について、出産への医療化や西洋医学と対峙する概念としての「東医」の創出、そして伝統薬の収集といった事例を取り上げながら検討される。

第2章「西医が主導する『東医』の制度化と実践—ベトナム民主共和国（北ベトナム）」では、フランスと日本の植民地統治からの独立後、南北分断期のベトナム民主共和国（北ベトナム）による伝統医学の組織的な研究・諸制度の整備過程が、明らかにされる。そこでは、「われわれの薬」としてのベトナム独自の「科学的・民族的・大衆的」な医学を築くという目的のもと、「北薬」「東薬」「西薬」といった伝統医学の位置付けや正当性・権威を示す語彙や概念が整理されていく過程が述べられている。

第3章「『東医』『西医』の競合と混交—ベトナム共和国（南ベトナム）」では、南北分断期のベトナム共和国（南ベトナム）における伝統医学の制度化について、「西医」と「東医」が、その担い手の国籍を含む諸制度によって厳格に区別・管理されていく過程が紹介される。

第4章「再編制される『伝統医学』—南北統一以後」では、南北統一後のベトナムにおいて伝統医学が再編成されていく過程が、「民族医学」という名称の誕生に着目して分析される。そこでは、南北分断期において、「東医」と名指されていた伝統医学が、「民族医薬」「民族医学」という呼称に置き換えら

れていく過程が検討される。

第5章「『伝統医学』教育と医師養成—理論化の困難と創造される実践」では、伝統医学の制度化の柱となる専門医養成の現況と、教育を支える医療資源との関係について、中部フエにおける北薬の位置付けの変遷に注目しながら、その担い手たちの実践とともに明らかにされる。

終章「『伝統医学』の制度化—伸縮する境界による囲い込み」では、植民地統治から独立・南北分断・統一という激動の歴史のなかでその境界を変容させながら生き抜いてきた伝統医学とその制度化の過程を、その担い手たちの経験とともに明らかにしたうえで、「伝統医学」から見えてくるベトナムという国家の形成過程が検討される。

以上が、本書の概要である。植民地経験や中国からの影響、共産主義政権やアメリカとの戦争など、激動の時代に晒され続けてきたベトナムという国家において、「伝統医学」の位置付けやその制度化を論じることの苦労は想像に難くない。本書は、現地語で書かれた文献資料に加えて現地でのフィールドワークにもとづき丹念に検討したふたつとない貴重な研究であるといえる。

伝統医学研究における本書の意義に敬意を表しつつ、簡単ではあるが、以下に2点ほどコメントを述べさせていただきたい。

ひとつ目は、本書が対象とする時代の人びとの暮らしや健康をめぐる背景についての記述である。本書は、ベトナムにおける医療・医学を対象にしたものであるが、社会における医療のもつ主要な意義が人びとの「疾病」

の「治療」や「健康」の維持・増進であることを踏まえると、本書が対象とする激動の時代のベトナムの人びとの暮らしや生活習慣等がどのように変容していき、そのなかで「健康」や「疾病」がどのようなものであったかについて踏まえたうえで検討する必要があるのではないだろうか。これらが明らかにされることで、ベトナムにおける「伝統医学」の意義や、それが制度化されていく必然性をより深く理解することができるだろう。医療の制度化は、政治経済的な変化に加えて、しばしば人びとの生活変容や疾病の流行によってもその必然性が顕となる。とりわけ、未知の感染症のパンデミックに人びとの暮らしが晒され社会が大きく変容しつつある今日においてはなおのこと、医療の制度化と疾病との関係性について丹念に検討する必要があるだろう。

ふたつ目は、伝統医療で使用される薬剤資源とその知的資源の所在をめぐる問題である。ベトナムに限らず、伝統医療の制度化をめぐりしばしば顕在化するのが、原薬を含む薬剤資源およびそれに関する知識の所有をめぐる政治経済的な軋轢である。とりわけ、20世紀以降の国家主導の伝統医療の制度化について議論するのであれば、避けておることのできない問題だろうが、本書では、これらについての言及がほとんどない。ナショナリズムの拠り所としてベトナム独自の文化としての「われわれの医療」が希求されていくことと同時に、グローバル経済のなかでの伝統医療資源の価値とそれに対する制度化についての検討がなされることで、ベトナムの

伝統医療について、対旧植民地宗主国、対中国、対アメリカといった限られた関係性にとどまることなくより広い視点で検討することができるのではないかと考えられる。

世界中がパンデミックに巻き込まれた歴史的な転換期を経て、人びとの暮らしや健康、医療がもつ社会にとっての意義が劇的に変容する今日、伝統医療研究は今後も検討すべき課題が山積している。本書で示されたベトナムの伝統医療の制度化の研究は、新たな頁とともに更なる展開が大いに期待されるものであろう。

高田 明. 『狩猟採集社会の子育て論—クン・サンの子どもの社会化と養育行動』 京都大学学術出版会, 2022年, 288 p.

大場麻代\*

本書は、『生態人類学は挑む』シリーズ全16巻のうちの第8巻である。著者は、(ポスト)狩猟採集社会の子育てに関するこれまでの先行研究を概括し、約四半世紀(現地での総滞在期間は2021年10月時点で48ヵ月間)にわたるフィールドワークの知見から、狩猟採集社会の子育てを再考している。本書は子育て論であるが、なぜ著者は狩猟採集社会の子育てに着眼したのだろうか。第1章でふれているように、著者は元々心理学を専攻し、その後人類学に転向している。その過程で、発達相談員の見習いとして乳幼児の発

\* 帝京大学外国語学部